

あれは何時の事だっけ……。莉桜達と撮影でキャン普してた時だっけ。人影のない山の中のキャン普場。そこに居るのは僕らと〇田の三人と撮影スタッフだけ。なのに『見上げてごらん』なんて声が聞こえて、最初は皆吃驚してたね。周りを見渡すと僕らが撮影するスタッフの乗るバンの他にもう一台黒塗りの高級セダンが停まつててさ。放送するテレビ局が安全のために停まつて慣れないうちには貸し切りにしてくれてたから僕ら含めて四台しか停まつてない筈なのに、五台目が居るんだからさ。

「セナさん、あれ誰ですか？この撮影クルーじゃ無いですよ」  
「誰だろうね、ちよつとスタッフ、確認してきてよ」

そんな感じでスタッフが車のナンバーがテレビ局関係かをまず確認したりしてたけど、一切該当がなかったんだっけ？そりやそうだよ、撮影してた制作会社の車でもテレビ局が用意した車でもない単なるレンタカー何だもの

「れナンバー？レンタカーって事は十中八九、関係者車両じゃない……？でもこつて貸し切りなんですよ」  
「そうだね、あースタッフ、一応確認するけどトランクになんか変な口ゴステツカー貼つてない？あ、ある？そっかー。ちよつと待つてね、僕の方でも確認する」

そこから僕はカメラを回させながらゆっくりと車に近づいていったんだっけ、あれは危険が無いと思つたからね。ロゴステツカーを確認したのも、姉貴の系列の会社の車かどうかを確認しただけだから。え？何で危険がないと思つたかだつて？そのレンタカー会社がナンバーで用意する車は姉貴の系列で働く社員だけが乗れる車だからね。

「ノックしてもしもーし、なんてね。ほら出ておいで晶」  
「バレちゃったかー。まあいつか」

「莉桜も紅葉もびつくりしてるねえ……」

まあ当然だよ。不審車両から出てくるのはあの瀬崎晶なんだからさ。

「どうしたの？突然来たりしてさ、あ、番宣してく？」

「セナに会いに来ただけだよ。番宣も特に無いかな」

「ふーん、じゃあ一緒に星でも見ようか、さっきの『見上げてごらん』って晶でしょ？」

「それもバレてたかー。まあセナと一緒に居るならいいよ」

「突然の大物ゲストにスタッフも喜んでるし、今日は停まつてけば？」

「うん、そうするね。ああ、でもひとつだけ」

「何？」

「いきなり来てごめんね。〇田の二人、まだ混乱して話せないね」

「そりやそうだよ。晶は虫除けスプレーぐらいしなさい」

「大人しくセナの言うこと聞きまーす」